



名寄市立大学の窓から

知への誘い

vol.93

子どもが「遊ぶ」ことの意味

保健福祉学部 社会保育学科 准教授 棚橋 裕子



「子どもは自由」「子どもは遊びが仕事」。世間では、子どもの存在感や子どもらしさを表す定番の言葉でしょう。「子どもがいかに自由感をもって遊びに没頭するか。」は、私が幼稚園教諭時代に大切にしていた保育観でもありました。



子どもが自ら出会い興味関心をもって向き合う遊びとは、実は形になっていないいわゆる「名もなき遊び」が多くあります。例えば、私が出会った子どもの中には、拾ったドングリに次々と架空の命名をしていた年中の男の子がいました。やりとりの終始をそばで観察していましたが、たいそうでたらめな命名で、「これは〜、ニシドングリだな！」



「こいつは、シリドングリだー」といった具合に次々と命名していきます。その場面だけを見ると、ノリと勢いででたらめに発しているだけに見えますし、「〇〇(男児の居住地域)には、4種類のドングリあるんだぞ。」など、やりとりが進めば進むほどでたらめ度が増していきます。そんな彼の行為を支えていたのが、仲間の存在でした。男の子が発する情報に「へえ〜!」と感心したように目を輝かせ、「それなら、これはジョウドングリだなー」と真似る様子を見ながら伝染していくでたらめ遊びに、必死に笑いを堪えていたことを覚えています。



このでたらめな行為を幼稚園における「子どもの大切な遊び」と捉えるには、もしかしたら一見無理があるように思えるかもしれませんが、ですが、「〇〇遊び」とつくづくつてしまいがちなフィルターを外し、子どもが経験していることの中身を掘り下げていくと、見えてくる世界が違ってくるのです。彼らは、仲間による支えられている感覚をもちつつ、自分たちの中の新しい意味や世界を求め、でたらめか否かを超えた次元で遊びを楽しんでいたのでしょう。遊びが現実とイメージを行き来しながらも、そのおもしろさを仲

間と共有できたとき、子どもの中に「遊びが楽しい」という実感が湧いてくるのではないかと思います。

聖心女子大学の河邊貴子氏は、「子どもはモノとかかわることで状況を生み出しながら遊ぶ」と述べています。遊びの特徴には、モノを何かに見立てたり、何かになりきったりすることで誕生する虚構世界があり、「個を超えて同じ動きをする他者との間に生まれた共感性が遊びの動機を高めていく」のだと言います。ドングリをめぐる虚構世界は、その遊びを共有した子どもたち固有の状況の中でおもしろさをはぐくみ、改めて子どもが遊ぶことの意味に向き合わせてくれるものでした。

やはり、「子どもは自由」で、「遊びは子どもの仕事」なのです。



大学図書館へようこそ!

大学では現在夏休みのため、短縮開館となっています。後期の授業は14日(月)から始まる予定ですが、図書館の開館時間などは、状況を見て判断することとなっています。ご利用の際は大学および大学図書館のホームページをご確認ください。

【9月の開館について】

9月1日(火)~12日(土)は18:50閉館です。
14日(月)以降は未定ですが、21日(敬老の日)と22日(秋分の日)は休館します。



大学図書館にはこんな本があります 〜「知」への誘い〜からもう1歩〜

- 子どもの遊びに関する図書を紹介します。
- 『遊びを中心とした保育』 河邊 貴子/著 萌文書林
→子どもの遊びをどう理解するか、多くの保育記録を読み解きながら、保育者の役割を探っています。
- 『遊びこそ豊かな学び』 今井 和子/著 ひとなる書房
→乳幼児期の遊びが学びへとつながり心を育む事例を数多く紹介しています。
- 『ごっこ遊び 自然・自我・保育実践』 河崎 道夫/著 ひとなる書房
→子どもたちはごっこ遊びで何をおもしろがっているのか、想像と現実世界のかかわりに目を向けています。

◆問い合わせ
名寄市立大学図書館 01654@7671(直通)
ncu_library@nayoro.ac.jp